

古代ローマ：ポンペイとガリア

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

Part2：モノが語る人類誌]③

2025 年 6 月 28 日

講座要旨

今年度の館長講座は、昨年度に引き続くシリーズでお話します。「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡ることにします。考古学と歴史分野を中心に、海外のミュージアムを訪ねて、世界史の流れを東北地方と関連させて考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。④中世フランスの美と遺産、⑤近代アメリカの光と影：西部開拓史、⑥世界民族誌と東北旧石器人の文化適応、⑦世界民族誌と東北縄文社会の復元、⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ、の順でお話します。これまでに私が調査研究を行ってきた地域の博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思います。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参考にしていただければ幸いに存じます。

世界史の流れというと漠然と感じられるかもしれません。もっと具体的には、通年のテーマとしまして「時代区分」ということの意味を考えていきたいと思います。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っていきましょう。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出たいと思っています。

今回は、時代区分「古代」を取り上げます。日本では、「古墳時代」以降を、「原始」の次の時代区分「古代」と考えることが一般的です。世界的には「古代国家」の成立を指標にすることが多く、農耕や牧畜の生業に基づく「生産経済」の発展を前提にして社会階級が発生し、支配機構の確立、武力の専有、文字の使用、冶金術の普及、地域集団の分立から統合へ、など「古代国家」の要件を考察していく研究が進められてきました。しかし世界の国家成立過程には多くの多様性があり、なかなか統一的に理論化するには至っていません。それだ

け、人類の歴史には、多くの別々の道筋があったということでしょう。近代歴史学はまずヨーロッパで体系化されたので、実際にはすこぶる多様な人類の発展のなかで、特にヨーロッパが重視されてきた歴史があります。19世紀後半には、古代奴隷制社会、中世封建制社会、近代資本主義社会という生産様式の発展段階が共通認識となりました。古代社会の認識はギリシアやローマの古典古代をモデルとしていたので、広大なオリエント、中国など東洋は、歴史上かなり異なる社会発展史をたどったことから、マルクス主義史学などでは「アジアの生産様式」が論じられました。また古代国家といっても、初期国家、都市国家から領域統一国家まで多様な段階が考察されました。

今回は、ローマ帝国時代の遺跡や博物館資料を訪ねて、実際の古代社会が残した文化遺産の特質を考えてみます。イタリア南部の中心都市、ナポリの近郊に、有名なポンペイの遺跡があります。紀元79年に、ヴェスヴィオ山の大規模な噴火によって、一夜にして消滅した街の遺跡としてもよく知られています。ポンペイは、ヨーロッパで近代考古学が形成されてきた18世紀に発掘が始まり、現在も調査が続けられています。1997年には「ポンペイ、エルコラーノ、トッレ・アンヌンツィアータの遺跡地域」として、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。講座では、館長撮影の多くの写真で、この遺跡が現在どのように保護、修復、公開されているか、実際の状況をご紹介します。観光面でも整備された遺跡街区、公共施設の数々、神殿、劇場、公共浴場、円形闘技場、街の家々の多様な姿、富裕層の邸宅、壁を飾っていたフレスコ画、床を装飾するモザイク画、ローマ時代の大理石やブロンズの彫刻表現、復元植物園、舗装道路と水道、災害の遺構、火砕流に吞まれた人物像（「石こう人間」）など、古代ローマの地方商業都市、火山灰に埋もれた港町のような様子を探ります。エルコラーノ（ヘルクラネウム）は、やはりA.D.79年の噴火災害で埋もれた都市で、住宅地に隣接した遺跡が保存、公開されています。これらの遺跡からの膨大な出土品は、ナポリ国立考古学博物館に収蔵されています。それら優品の数々を見ながら、古代ローマの芸術表現について考えます。フレスコ画は、壁に漆喰を塗り、乾いてしまう前に顔料で描く技法、モザイク画は、細かい多様な色の石などを、床面にタイルのように組み合わせてテーマを描く技法で、いずれも古代ローマで非常な発展をみました。彫像は、古代ギリシア期の作品をモデルにして、ローマ時代に製作されたものが多数あります。

ヴェスヴィオ山の北山麓に、ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡があります。東京大学名誉教授で、文化庁長官も歴任された青柳正規先生が、継続的な発掘調査を行なって、大きな成果が続いています。東京大学の調査団では、松山聡先生が現場の指揮を取られています。講座では、2009年に東北大学文学研究科歴史科学専攻のプログラム、大学院GP「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」（代表者 阿子島）による研修で、遺跡の発掘調査に参加させていただいた際の状況をご紹介します。ローマ帝政前期創建の別荘大邸宅と宗教施設、神話のフレスコ画、ディオニソス神彫像、大規模なワイン工場跡などに関する世界的な研究成果です。なお、古代ローマ美術の第一人者、芳賀京子先生（東大教授）は、東北大学の上記GPに際して、美学西洋美術史分野のご指導を担当されました。皆様に深甚の謝意を

表する次第です。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

講座の「お題」

・今回は、古代世界を訪ねる旅です。この「古代」という時代区分は、世界史的に見るといくつかの類型があります。そのなかで、近代ヨーロッパの源流となった「古典古代」の世界を、実際の遺跡や遺物を訪ねながら考えてみましょう。それは一方で、日本古代の世界と比較していく視点にもなるでしょう。

・今回の副題は、(ヨーロッパ世界の源流を訪ねて：その1) としました。「古代ローマ」なんというロマンに満ちたイメージでしょう！ 歴史学・考古学の大テーマとして、大げさというと明治時代以来、ヨーロッパの蓄積されていた業績を学び続けてきました。さまざまなメディアでも、歴史書や概説はもとより、小説、映画、テレビ番組、漫画まで、たいへん多彩なところがあります。美術館・博物館の特別展も、人気があります。格言にも多くあり、気づかずに使っているほどです。「ブルータス、お前もか」(カエサル暗殺)、「ルビコン川を渡る」(カエサルのローマ内国への進軍)、「もし鼻が低かったら・・・」(クレオパトラとアントニウス)。ことわざでは「ローマは一日にして成らず」「すべての道はローマに通ず」「郷に入ったら郷に従え(ローマではローマ人のように振る舞え)」。まさに「永遠の都」です。

・近年、世界史の現状認識では、「ヨーロッパの凋落」ということが言われるようになってきました。確かに、19世紀後半の「帝国主義」の時代以降、世界を「牛耳ってきた」ヨーロッパは、多極化する世界の中で、ひとつの地域という位置になりつつあるようです。しかし、歴史学・考古学をはじめとして、学術の世界では、なお非常な指導的位置を持っています。国際会議などでも、アジアで開催の場合も、「基調講演」 **Keynote lecture** に欧米の第一人者が登場するのは、定番です。一例ですが、6月に東北大学川内北キャンパスで開催された、APA(アジア旧石器協会)では、イギリスのロビン・デンネル教授がこのお役目で、12の国と地域から、135人が集結しました。(日本旧石器学会主催、東北大学東北アジア研究センターなど共催、実行委員長・佐野勝宏教授)。

・ヨーロッパの源流となったのは、古典古代世界でした。今日は、意外と知らない遺跡や文化遺産の現状がどうなっているかを、現地に探索してみることにしましょう。次回に続く、2回セットの講座です。今回も、膨大な先人諸氏の先行研究が蓄積されている分野です。あくまでも、館長的試論として、長い研究史の中から楽しんで聴いていただければ幸いです。

時代区分の本質とは？

・さて「時代」ということの、本質はなんでしょうか。一般的に歴史学で考えられてきたの

は、次のような要素と思います。

生業のありかた

生産を行なう手だて

生産のしくみ

生産物の分配のきまり

社会のつながりを成り立たせる原理

人びとの考え方を方向づけるもの。

これら多くの要因の組み合わせと相関は、人類の歴史の流れの中で法則的にとらえられるか、という多くの学者、思想家、歴史家の努力がありました。

・これらの例を、難しい用語で表わしてみますと、獲得経済と生産経済、生産手段、生産様式、社会構成体、思想・宗教・倫理・行動原理、などになるでしょう。史的唯物論（マルクス主義歴史学）系の用語は、なお健在のようです。このことに関しては前回 5 月の講座、縄文文化についての「半世紀前の、先人たち」の物語で考えてみました。

・一方で、世界の文化は、実にさまざまで、特定の用語で一般化することは、きわめて難しい面があります。今回は、古代世界のひとコマを実際に訪ねながら、歴史における法則性、発展とは何か、多様さとは何か、大きな課題に触れる旅に、出てみましょう。

古代ローマ世界のイメージ

・古代ローマというと、さまざまなイメージが連想されます。代表的なところを列記してみますが、いずれも現実だったのです。

公共浴場でリラックス。「テルマエ」と呼ばれる公衆浴場は、ほとんどの都市計画にありました。ローマ人の風呂好きは徹底していて、社交場の機能もあったといえます。

剣闘士の命懸けの熱き闘い。巨大な闘技場が各都市に作られて、奴隸身分であつたけれども憧れの対象でもあつた「グラディエーター」（剣闘士）たちが、真剣を手にして戦いました。殺されることも多かったといえます。

多くの奴隸が支えていた生産。主要な経済活動には奴隸身分が従事していました。属州により異なり、また諸説ありますが、全人口の 2 割～3 割程度が奴隸ともいわれます。

地中海文明の交易ネットワーク。ローマ帝国は、地中海全体を「我らの海」として、自在に各地域の「有無相通ずる」交易活動を行ない、経済が発展しました。沈没船も「水中考古学」で研究されています。

長期間の平和な世。ローマ帝政期になってからは特に、地中海の周辺地域まで広がった帝国領に置かれた「属州」を通じて、恒久的な「ローマの平和」（パクス・ロマーナ）がもたらされました。日本近世だったら「天下泰平の世」にあたる繁栄の基礎でもありました。

驚くべき土木技術の水準。巨大建築が普遍的に帝国内にあり、周辺異民族には脅威・驚異だったでしょう。コンクリート技術をはじめ土木工学、建築工学は、その遺産が現在までも残り得るレベルでした。

水道のある生活（水道橋）。各主要都市まで遠距離を流れる水道と、各都市にめぐらされた水道は、なお現役で活躍するものさえあります。

豊かな農産物と高い生活水準。古代ローマで達成された水準は「ヨーロッパの産業革命まで、古代ローマ以上の文明はなかった」ともいわれます。

・館長は 1980 年代から、断続的ではありましたが、フランス先史考古学を研究してきました。フランス各地の博物館、大学、遺跡などを訪ねるたびに、「古代ローマ」の世界がすごいので、圧倒される経験が多くありました。とにかく豊富な遺跡、遺物で、非常に多くの遺産が、現在もヨーロッパ中に残っています。

・フランスは、ローマ時代には、「ガリア」という「属州」で、ガリア総督が統治していました。フランス南部は属州内でしたが、北方には多くの異民族がいて武力の面でも強大でした。共和制末期（ユリウス・カエサルの時代）には、ローマ軍の北方遠征が繰り返されました。カエサル著「ガリア戦記」は紀元前 50 年代の辺境について伝える第一級の史料です。中世に多くの写本が作られて伝わっています。写本相互は、系統関係で整理されるほど研究の蓄積があります。古典古代の学芸は、アラビア世界を経て、ヨーロッパの中世に伝わり、今に残された歴史を忘れてはなりません。

今回の背景とソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡

・2008～2011 年に「文科省大学院 GP プログラム」に採択されました。大学院教育の一部で、東北大学文学研究科歴史科学専攻が「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」の主体として、非常に数多くのプログラムを実施しました（代表者 阿子島）。歴史科学専攻は、ほぼ文学部旧史学科にあたり、学会「東北史学会」の母胎でもあります。

・大学院 GP は、日本史、東洋史、ヨーロッパ史、東洋・日本美術史、美学・西洋美術史、考古学の 6 研究室から構成した学際的教育プログラムでした。2009 年 9 月に、イタリア古代文化の大学院生研修（博物館学芸員、博物館学）として、考古学分野の院生が、ナポリ国立考古学博物館、ポンペイ遺跡、エルコラーノ遺跡を訪問し、ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の発掘調査に参加しました。大学院 GP プログラムの美学・西洋美術史分野担当は、芳賀京子先生でした。のちに東京大学教授に移られました。2022 年の宮城県美術館夏季特別展「ポンペイ」の監修者です。

・皆さんご承知かとは存じますが、青柳正規先生は、東京大学から国立西洋美術館長、文化庁長官、橿原考古学研究所長などを歴任されています。長年ローマ帝国関係の遺跡発掘調査を進められています。文化庁主催の巡回展「発掘された日本列島」は、2014 年度に東北歴史博物館が会場となりましたが、開幕式では青柳文化庁長官にご挨拶いただきました。私は当館の委員を務めていた関係で、展示を見ながらいろいろとお話を聴く機会があり光栄でした。先生は 2002 年から、ヴェスヴィオ山の北麓にあるソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡の東大による発掘を主導され、現在は村松真理子教授以下の調査団に引き継がれています。現場で指揮をとられるのは松山聡先生（東北大学 OB）です。東京大学 2024 年 4 月の発表は

大きく報道されましたが、同遺跡の下層から初代皇帝アウグストゥスの別荘の可能性がある遺構が発見されました。皇帝は A.D.14 年にヴェスヴィオ山の北側に所在した別荘で逝去したと記録されています。A.D.79 年の火山噴出物の下層から、窯状の遺構（浴場か？）が見つかりました。壁際に並んだアンフォラ（大型土器）の出土もあります。

・ソルマ・ヴェスヴィアーナ遺跡では、2 世紀中頃に新しい建物が建てられ、別荘邸宅は宗教施設も併設した大規模なもので、ペプロフォロス像（ペプロス衣）、ディオニソス像（ヒョウの子を抱く）など彫刻の優品も出土しています。4 世紀にはワイン製造施設として使われるようになり、ワインを醸造した大甕が地中に並んで出土しました。大甕 1 個で 500～700 リットルの容量があり、果汁を流す溝状遺構もあります。大甕 1 個で 700 本ものワインが製造できたことになります。そして遺跡地は、A.D.472 年の噴火で埋没しました。大学院 GP による調査参加の際は、この部分の発掘が進行中でした。遺構群は地下 10m もの深部にあり、発掘現場はさながら土木工事現場のようです（スライド）。発掘面積は 3500 平方メートルに及びます。現地説明会も開催され、これはイタリアでは珍しいとのことでした。講座では、館長が撮影した多数のスライドで、発掘の様子を紹介いたしました。この遺跡は火山災害の罹災とそれからの復興という、人類史上でも重要な問題の解明に対して大きな意義を持っています。青柳先生、芳賀先生、松山先生、杉山浩平先生はじめ、東大調査団各位に深甚の謝意を表する次第です。

ポンペイを訪ねる

・イタリア南部の主要都市であるナポリの東の郊外に、ヴェスヴィオ山がそびえています。1281m の活火山です。その南東側にポンペイ遺跡があり、16 世紀末に再発見されて、18 世紀半ばから発掘が行われてきました。近代考古学は古典古代を探究するため発達したという一面もありますから、考古学にとって最重要な遺跡といえるでしょう。火山噴火で一夜にしてそのまま埋もれた街として世界的に有名で、一大観光地でもあります。火山灰に埋もれた空洞に石膏（せっこう）を流して形が復元された断末魔の人物像（石膏人間）などは衝撃的ですね。日本からポンペイ遺跡に立ち寄るイタリアツアーもあります。

・ポンペイの現状を多くの写真でご紹介しました。城は城壁で囲まれていて、門が見学の入り口になっています。世界文化遺産に登録されたのは 1997 年です。年間訪問者数は、300 万人にもなるとのことです。なおスライドに出てくる院生（当時）のひとは、現在東北歴史博物館学芸職員の傳田惠隆さんです。お見知りのお客さんもいらっしゃると思いますので、一応ご紹介しておきます。

・公共の広場があって、神々を祀る施設が置かれ、現在は並ぶ柱列の下部だけを残していますが、建物の規模や内部の配置が知られます。発掘調査の過程では、原位置をはずれた建材や排土（残骸の土砂）は取り外して復元するので、このような野外展示になります。貴重な出土遺物の数々は、整理（水洗、接合）・分析・報告（図化を含む）されて収蔵されます。優品は博物館・美術館で公開展示されます。ポンペイの場合は、ナポリ国立考古学博物館に

収蔵・展示されているものが中心です。この博物館にはのちにご紹介するエルコラーノ遺跡出土品も多数あります。200 年以上にわたって発掘調査されていますので、その時々考古学の研究水準を反映して、記録の精度は様々です。初期の発掘では、「モノ掘り」すなわち彫刻作品など遺物目当ての傾向もあったとされますが、それはどこの国でも考古学の発達途上の過程では通常のことでした。

- ・遺跡の修復工事、環境整備工事は、現在も継続して実施されています。スライドの現場では看板に、工事の詳細が図面入りで掲示されています。日本の工事サインよりも詳しく、例えばこの工期の経費は 537,796 ユーロ、それは約 8,600 万円になることなどです。担当者のフルネームも多数あります。

- ・ポンペイを壊滅させた噴火災害の年月日について、近年新たな発見がありました（青柳先生の東大シンポジウムでの講義）。崖崩れで緊急に調査された街北部の壁に落書きがあつて、A.D.79 年 10 月 24 日に噴火災害があつたことを推定させる証拠です。「11 月の朔日の 16 日以前」と解説されて、10 月 17 日には、まだ街は存在していたことになります。これまでは、8 月 24 日という説が有力であったとのことでした。

古代ローマ文明の精華

- ・ローマ時代の建築では、コンクリート技術が高い水準にありました。スライドは、ポンペイの遺構の壁の一部です。石材やレンガと共に、コンクリートが使用されています。ローマ中心部の大闘技場（コロッセオ）も、大量のコンクリートを使用した壮大な建築です。ローマン・コンクリートと言われますが、非常に堅固で、2000 年経過しても頑丈なまま存在しているのは驚くべきことです。ローマ帝政時代に技術革新が蓄積して、現在の建築材料以上ともいう強靱さを持ちました。皇帝の死後に業績抹消の意図で埋められたという、ネロ帝の「黄金宮殿」でも、現在は地下にある建築空間が保存されています。ローマン・コンクリートには「自己修復コンクリート」というものもあり、地震などで亀裂が生じると、そこに水分が入って、成分の石灰が反応して固化し自動的に復旧するという、私たちの想像以上の技術がありました。

- ・2 世紀のトラヤヌス帝の時代に最大版図となったローマ帝国領の各地で、帝政ローマ時代の建造物は堅固に残っていて、その後の中世各都市の発展過程でも、下層に残るローマ時代の遺構を利用していました。次回紹介しますソルボンヌのクリュニー修道院パリ拠点でも、ローマ時代の浴場建築の一部が基礎に用いられています。

- ・ポンペイの遺跡が整備された様子を、館長撮影の多くの写真で紹介しました。街区には案内標識があつて、地図をみながら散策、見学できます。古代ローマの社会構成は、超格差社会とも言えるべきもので、貴族、富裕層、一般平民、奴隷の間には、大変な差がありました。しかし、これは流動性も持っていました。解放奴隷が活躍していた記録もあります。街の南西部には、公共空間、祭祀の施設（神殿）などが、広場を伴って存在し、公共浴場もありました。紀元前 2 世紀頃から最盛期を迎えて、商業都市として栄えました。A.D.79 年の噴火

前には、人口およそ1万人との推定があります。

・ローマ帝国の統治法は「パンと見世物」と端的に表現されます。庶民にそれらを提供するのは統治者の役割とされ、無料の場合が多くありました。剣闘士（グラディエーター）のショーは、最も人気のあった娯楽といえます。そのための円形闘技場は、各主要都市にありました。ポンペイでも街の南東部にあり見学できます。一般に古代世界は現代の感覚ですと、「何と残酷な」社会との印象を受けるかもしれませんが、それは現代の基準から見ると、ということであって、それぞれの時代には、それぞれの世界があり価値観があります。歴史的に遡って、どの時代区分の対象を考えるにも、それぞれの時代特有の文化の価値体系を理解することが大事です。

・街には二階建ての建物が多かったですが、現在の史跡公園では一階部分が主です。大通りは、石畳みで舗装されていました。水道が通じていました。街の住民は水を利用した生活を送りました。土地の水はけが良くないので、歩行者用の敷石（道路面の飛び石）がそちらこちらにあり、人びとは横断に使いました。馬車が頻繁に通行していて、石畳みにワダチ（轍）が残ります。庶民の家にはカマドが無かったので、食堂を利用しました。食堂はじめ、各種の職業の建物が残っています。港町には、娼館もありました。

・ナポリ国立考古学博物館は、市内中心部にあり、ポンペイやエルコラーノの出土品も豊富に収蔵しています。ファルネーゼ・コレクションが有名です。ブルボン王家の博物館に由来し、1777年に開設されました。大規模な建物で、中庭が美しいです。ローマ時代の石造物資料も多く展示があります。墓石、碑などもあります。当時の生活を彩った、さまざまな工芸品を見ることができます。ホールでは、彫刻の優品（大理石、ブロンズ）が並びます。これらは富裕層邸宅の室内調度品でもありました。公共の場にもありました。講座では、博物館の建物と展示の様子をスライドで、たっぷりご紹介しました。

・ポンペイの家々の壁を飾ったフレスコ画美術、床を埋めたモザイク画美術の多くが、切り取られて額に入り、この博物館で展示されています。彫刻や工芸品、日常生活の道具など、古代ローマ文明の精華を、一堂に観て鑑賞できる場所として、イタリア南部を旅するならば必見のポイントといえるでしょう。

・次回講座は、引き続きヨーロッパ世界の源流を訪ねる旅です。火山災害で壊滅した、もう一つの街について、ローマ本国と属州について、また古代世界から中世世界への時代転換などを、連続して考えてみます。またのご来館をお待ちいたします。（最後までお読みいただき、有難うございました。）

（本稿は、館長講座での配布資料に補足したものです。）